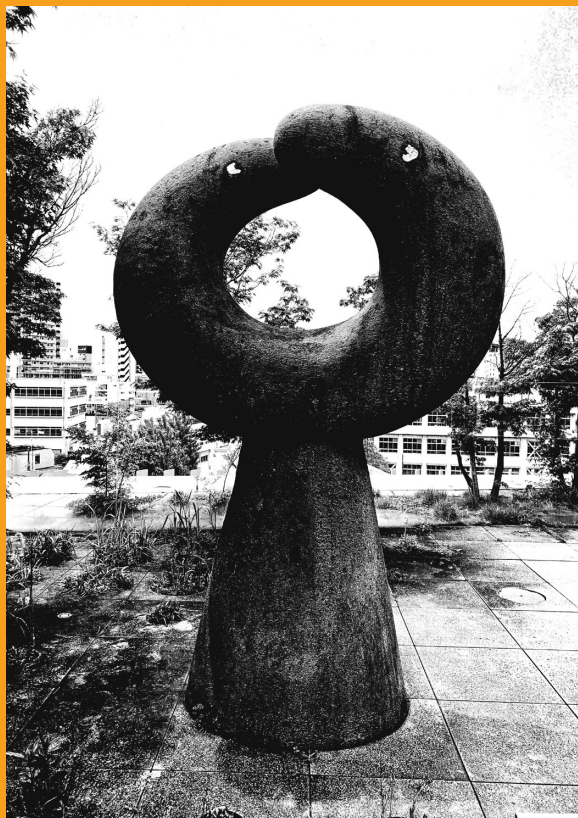


教育哲学会第65回大会プログラム



日程：2022年10月22日(土)－23日(日)

場所：慶應義塾大学 三田キャンパス 南校舎4階・5階

主催：教育哲学会 共催：三田哲学会

大会日程

第1日 10月22日(土)

- 9:00 受付 (南校舎5階)
- 9:30 一般研究発表
～12:00 (南校舎4階 443・445・446・447教室)
- 12:00 昼食・休憩
～13:00 次世代育成企画打ち合わせ
(南校舎5階 456教室)
研究討議打ち合わせ
(南校舎5階 457教室)
- 13:00 次世代育成企画
～14:30 (南校舎5階 455教室)
- 14:45 研究討議
～17:45 (南校舎5階 南校舎ホール)

第2日 10月23日(日)

- 9:00 受付 (南校舎5階)
- 9:30 一般研究発表
～12:00 (南校舎4階 443・445・446・447教室)
- 12:00 昼食・休憩
～13:00 課題研究打ち合わせ
(南校舎5階 456教室)
- 13:00 総会 (南校舎5階 南校舎ホール)
～14:00
- 14:00 課題研究
～16:30 (南校舎5階 南校舎ホール)
- 16:45 ラウンドテーブル
～18:45 (南校舎4階 443・445・446・447教室、
5階 456・457教室)

大会前日

10月21日(金)

- 14:30～15:30 監査 (東館4階 オープンラボ)
- 16:00～18:00 全国理事会 (東館4階 オープンラボ)

参加要領

- 参加申し込み 大会サイトで10月15日までに参加申し込みをしてください(発表者も含む)。
- 受付 南校舎5階 南校舎ホール前
- 大会参加費 3,000円(学生2,000円)
※懇親会は開催しません。
※三田哲学会との共催のため、三田哲学会会員の参加費は無料です。
- 一般研究発表 発表20分/質疑応答5分
※万一発表を取りやめる場合、発表者は速やかに大会準備委員会(下記メールアドレス)までご連絡ください。なお、欠席の場合、発表時間の繰り上げは行いません。

大会準備委員会メールアドレス: pesj65.2022@gmail.com
大会サイト URL: <https://sites.google.com/view/pesj65>



参加要領

○大会開催形式について

- ・本大会では、**一般研究発表、次世代育成企画、総会、ラウンドテーブル**は対面形式のみで開催し、**研究討議**および**課題研究**は対面形式に加えオンライン中継（リアルタイム配信）を交えた形式で開催します。
- ・万一、不測の事態により大会開催形式に変更が生じた場合は、大会サイト（Webページ）を通じて通知いたしますのでご確認ください。
- ・懇親会は開催しません。

○参加にあたってのお願い

- ・大会申し込みは、事前に大会サイト（Webページ）にある「参加申込フォーム」から参加者情報をご入力の上行ってください（発表者も必ずご入力ください）。
- ・本大会では、原則、紙媒体での資料配付は行いません。各報告の資料は大会サイトにアップロードしますので、閲覧用の電子デバイス等を各自でご準備ください。
- ・学内へのお車での入構はできません。公共交通機関でおいでください。
- ・会員控室として453教室を適宜ご利用ください。
- ・充電の必要がある場合は、南校舎ホールもしくは453教室を適宜ご利用ください。
- ・昼食は各自でおとりください。なお、キャンパス近辺にコンビニエンスストアや飲食店がございます。学食は三田キャンパス内の「山食」が初日の土曜日のみ10時30分～14時で営業しています。
- ・授乳室、クローク、その他の特別なサポート・支援が必要な場合は大会準備委員会までお問い合わせください。

○新型コロナウイルス感染症（COVID-19）対策のお願い

- ・体調がすぐれない場合はご来場をお控えください。
- ・不織布マスクの着用とこまめな手洗い・手指消毒にご協力ください。
- ・研究発表者や司会者も不織布マスクを着用し、間隔をあけて着席してください。
- ・会場では適宜換気を行います。できる限り相互に距離を取り、会話や飲食は可能な限りお控えください。特に飲食を伴うミーティングはお控えください。
- ・会員控室では感染防止の観点から茶菓の提供は行いません。会話を伴う飲食もお控えください。

以上、ご理解のほどよろしくお願い致します。

第1部会

啓蒙・教養・知識 【南校舎4階 443教室】

司会：間篠 剛留（日本大学）・室井 麗子（岩手大学）

- 9:30 ドニ・ディドロにおける啓蒙思想の再検討
片桐由美子（大阪大学・院生）
- 9:55 「自然で共通なコトバ」の全身感覚について
寺崎 恵子（聖学院大学）
- 10:20 イギリスにおける「教養」の捉え方の変遷からみたホワイトヘッド教育論の位置
藤原 翔（広島大学・院生）
- 10:45 リベラルな高等教育目的の正当化論
— R. バーネットの「解放的目的」を手がかりとして—
柳田 和哉（京都大学・院生）
- 11:10 「知識基盤社会」における「知識」とは何か
松村 一徳（大阪電気通信大学）
- 11:35 全体討議（～12:00）

第2部会

東洋の教育思想、日本の教育哲学 【南校舎4階 445教室】

司会：西村 拓生（立命館大学）・山本 正身（慶應義塾大学・名誉教授）

- 9:30 空海の三密修行における身体性
—「加持」概念に関する一考察—
藤林 優徳（名古屋大学・院生）
- 9:55 大正新教育と宗教思想
—宮沢賢治と佐藤瑞彦における「生命観」をめぐって—
深田 愛乃（慶應義塾大学・院生）
- 10:20 中国の教育思想家・蔡元培によるデューイ教育思想の受容と応用
—儒教はいかに活かされたか？—
任 雅楠（広島大学・院生）
- 10:45 「生成の教育学」の方法論的読解
—矢野智司の生成論はいかに読まれたのか—
日向 悠太（立教大学・院生）
- 11:10 種の論理から市民主義的教育思想へ
—久野収による田邊元への批判に着目して—
川上 英明（山梨学院短期大学）
- 11:35 全体討議（～12:00）

第3部会

ドイツの哲学と教育学【南校舎4階446教室】

司会：伊藤 敏子（三重大学）・野平 慎二（愛知教育大学）

- 9:30 躓きの石「カント形而上学・形而下学」とは何か
寺崎 賢一（都留文科大学）
- 9:55 教育学と解釈学
—教育学の基礎づけの学としての解釈学の課題—
瀬戸口昌也（大阪教育大学）
- 10:20 19世紀プロイセンにおけるミュージアム政策研究序説
伊藤 敦広（昭和女子大学）
- 10:45 ドイツ敗戦期ゲッティンゲン大学学位取得者にみる現代教育学・教育方法学の発生
動態について
—J・ゲーブハルト、G・スロットを手掛かりに—
鈴木 幹雄（神戸大学・関西福祉大学・名誉教授）
- 11:10 全体討議（～11:35）

第4部会

教育における公共性と正義【南校舎4階447教室】

司会：田中 智輝（山口大学）・虎岩 朋加（愛知東邦大学）

- 9:30 ハンナ・アレントの「行為」における非主権性
—主権者教育を再考する手がかりとして—
樋口 大夢（東京大学・院生）
- 9:55 市民性教育論における身体性の位置
—I.M.ヤングのフェミニスト現象学を手がかりに—
香川 圭（筑波大学・院生）
- 10:20 教育における熟議と公私領域の流動性：
ロールズの公共的理性に基づくアイデンティティ形成
中西 亮太（東京大学・院生）
- 10:45 H・ブリッグハウス & A・スウィフトの家族関係財アプローチとその批判的検討
—「中立主義」に基づく予備的考察
大野 孝太（名古屋大学・院生）
- 11:10 メイラ・レヴィンソンによる「リベラルな教育」の可能性
鶴海未祐子（駿河台大学）
- 11:35 全体討議（～12:00）

12:00 昼食・休憩
~13:00 次世代育成企画打ち合わせ (南校舎5階 456教室)
研究討議打ち合わせ (南校舎5階 457教室)

次世代育成企画 (南校舎5階 455教室)

次世代育成企画のこれまでとこれから

13:00 企画：次世代育成企画委員会
~14:30 下司 晶 (中央大学)・生澤 繁樹 (名古屋大学)
井谷 信彦 (武庫川女子大学)・小野 文生 (同志社大学)
平田 仁胤 (岡山大学)・室井 麗子 (岩手大学)

研究討議 (開催校企画) (南校舎5階 南校舎ホール)

口承・^{イメージ}画像・記憶と人間形成 —文化科学的教育学の試み—

14:45 司会：松浦 良充 (慶應義塾大学)・渡邊福太郎 (慶應義塾大学)
~17:45 発表者：小松佳代子 (長岡造形大学)・三代真理子 (東京藝術大学)
山名 淳 (東京大学)
指定討論者：眞壁 宏幹 (慶應義塾大学)

第5部会

心理と病理の教育思想【南校舎4階 443教室】

司会：須川 公央(白梅学園大学)・関根 宏朗(明治大学)

- 9:30 E.H.エリクソンの初期思想における事物・身体・自我
——遊びと「コンフィギュレーション」の児童精神分析——
濱本 潤毅(東京大学・院生)
- 9:55 ススバウムの感情教育論の特長と射程
——認知心理学、ケア理論、孟子研究からの再検討——
章 博文(神戸大学・院生)
- 10:20 ポストコロナの時代を生きる子どもと外傷性記憶
—『徴候・記憶・外傷』の発達の記憶論を基にした一考察—
菊池 壮太(京都大学・院生)
- 10:45 E.レヴィナスの他者論と強者の関係について
—コロナ後遺症における倦怠の症状を媒介にして
森 亘(大竹栄養専門学校)
- 11:10 学習者の自律を目指す心理学的学習論に関する一考察
—自己調整学習に着目して—
宮川 幸奈(熊本学園大学)
- 11:35 全体討議(～12:00)

第6部会

市民性教育の哲学【南校舎4階 445教室】

司会：片山 勝茂(東京大学)・村松 灯(帝京大学)

- 9:30 高坂正顕のカント解釈における「世界公民」の登場
—戦前から戦後への転換に着目して—
中村 優(東京大学・院生)
- 9:55 市民性教育の基礎論としてのバーリン価値多元論の可能性：
その「現実感覚」に着目して
高須 明根(広島大学・院生)
- 10:20 現代徳倫理学に基づく教育目的の構想
——「開花」(flourishing)に関わる英米教育哲学論議の分析を通じて——
川村 雄真(筑波大学・院生)
- 10:45 アリストテレスの「エビエイケイア」概念と寛容・利他性のアポリア
—価値多元的社会的教育におけるその問題点—
古舘 充斗(東京大学・院生)
- 11:10 絵本を通した世界市民の育成
—ススバウムの「物語的想像力」を中心に—
米川 泉子(金沢学院大学)
- 11:35 全体討議(～12:00)

第7部会

英米の教育思想における「経験」【南校舎4階 446教室】

司会：上野 正道（上智大学）・松下 晴彦（名古屋大学）

- 9:30 「なすことによって学ぶ」(learning by doing) の系譜整理
——19世紀アメリカの新教育を概観して
小笠原正太郎（早稲田大学・院生）
- 9:55 民主主義の担い手を育てるための図画工作科のあり方
—J・デューイの「オキュペーション (occupation)」概念を用いて—
伍 翔南（早稲田大学・院生）
- 10:20 C.S. パースのカテゴリー論的「経験」概念：
「質」と「意味」にまたがる「反応」の aspek とその偶然性
宮坂 朋彦（東京学芸大学・院生）
- 10:45 ホワイトヘッド哲学における経験の「生成」
小島 聖矢（名古屋大学・院生）
- 11:10 全体討議（～11:35）

第8部会

現代思想における歴史・時間・実践【南校舎4階 447教室】

司会：小野 文生（同志社大学）・白銀 夏樹（関西学院大学）

- 9:30 実践と理論の区別を相対化する臨床教育学の視点
—ハイデガー解釈学における実存の立場から
森 七恵（京都大学・院生）
- 9:55 エマニュエル・レヴィナスの初期時間論の教育哲学的考察
—「瞬間」概念に着目して—
中川 弘輝（東京学芸大学・院生）
- 10:20 芸術制作における思考の役割
—メルロ＝ポンティの絵画論を手がかりに
常深 新平（慶應義塾大学・院生）
- 10:45 「大人－子ども関係」に関する一試論
—アガンベンの「主権－ホモ・サケル」間の「例外関係」に着目して—
島本 篤（東京大学・院生）
- 11:10 ジョルジョ・アガンベンにおけるメシア的時間と言語活動
—「瞬間の教育学」に向けて
寺道 亮信（東京大学・院生）
- 11:35 全体討議（～12:00）

12:00 昼食・休憩
 ~13:00 課題研究打ち合わせ (南校舎5階 456教室)

13:00 総会 (南校舎5階 南校舎ホール)
 ~14:00

課題研究(学会理事会企画) (南校舎5階 南校舎ホール)

14:00 身体性と教育——「経験」と「つながり」の基盤を再考する

~16:30

司会：田中 智志(東京大学)・西村 拓生(立命館大学)

報告：藤井 千春(早稲田大学)・藤川 信夫(大阪大学)

門前 斐紀(金沢星稜大学)

ラウンドテーブル

(1) 「政治的なもの」と「教育的なもの」の交差 (南校舎4階 443教室)

—政治思想における教育／人間形成論の含意を再考する—

企画者：岸本 智典(昭和音楽大学)

(2) 人間形成・自己形成・アイデンティティ形成 (南校舎4階 445教室)

—人間形成論的のバイオグラフィー研究の来し方行く末を見据えて—

企画者：鳥光美緒子(中央大学)・野平 慎二(愛知教育大学)

藤井 佳世(横浜国立大学)

(3) 教育哲学研究における「科学性」の再検討 (南校舎4階 446教室)

企画者：鈴木 篤(九州大学)・平井 悠介(筑波大学)

16:45

~18:45

(4) 世界市民的教育の空間を考究する (南校舎4階 447教室)

—境界の内で／境界を越えて—

企画者：広瀬 悠三(京都大学)

(5) 存在論は教育学にいかなる貢献を果たし得るか： (南校舎5階 456教室)

「ハイデガーと教育学」という問題圏

企画者：森 祐亮(株式会社Open DNA/慶應義塾大学)

池田 全之(お茶の水女子大学)

(6) ウィトゲンシュタイン哲学に基づいた教育実践記述・分析の可能性

(南校舎5階 457教室)

企画者：平田 仁胤(岡山大学)・丸山 恭司(広島大学)

【第1日目】13:00～14:30

南校舎5階 455教室

次世代育成企画のこれまでとこれから

企 画：次世代育成企画委員会

下司 晶（中央大学）

生澤 繁樹（名古屋大学）

井谷 信彦（武庫川女子大学）

小野 文生（同志社大学）

平田 仁胤（岡山大学）

室井 麗子（岩手大学）

次世代育成企画委員会は2017年に発足して以来、大会時に5回の企画を実施してきた。これまで扱ってきたテーマは、投稿論文の執筆と査読制度、経験的研究との対話によって変容する教育哲学の境界、教育哲学研究の国際化と国際交流、教育哲学研究を通じた世代間の学术交流と学術知の継承、教育哲学・思想領域における博士論文執筆と学位取得をめぐる状況の変化など、多岐にわたった。

とはいえ、他にも委員会内では検討されながら、実施までには至らなかった課題も多い。教育哲学研究としての問いの立て方、人物研究とテーマ研究との違い、国際学会誌への投稿といったテーマはもとより、たとえば、ジェンダー、大学内外での業務、日々の授業実践など、学術研究の課題としてだけでなく、教育哲学者の日常を考えなおしてみる主題も考えられる。また、会員同士の日常的な交流会や研究会、若手向けのセミナーや若手研究者が中心となるシンポジウムの企画、現在、国際交流委員会とともに実施している会員有志による洋書講読のように、編集委員会や国際交流委員会などの教育哲学会内の他の委員会との共同、他領域の研究者たちとの共同企画など、次世代育成企画委員会の活動として実現に向けて考えていくべき課題は多くある。また、会員のみなさんから寄せられたご意見やご批判も少なくない。

第65回大会は、創設以来の委員会が第2期を満了する節目となる。そこで本年は、各委員がこれまでの企画や活動を振り返り総括するとともに、「若手」をはじめとする幅広い層の会員とともに、「次世代育成」のための課題をともに考えることによって、教育哲学会と教育哲学研究の未来に想いを馳せたい。次世代育成企画は会員のみなさんの積極的な参加によって成り立っている。新鮮な発想にもとづいた提言など、みなさんの声をぜひお寄せいただき、交流する場としたい。

【第1日目】14:45～17:45

南校舎5階 南校舎ホール

イメージ
口承・画像・記憶と人間形成
—文化科学的教育学の試み—

司会：松浦 良充（慶應義塾大学）・渡邊福太郎（慶應義塾大学）

発表者：小松佳代子（長岡造形大学）・三代真理子（東京藝術大学）

山名 淳（東京大学）

指定討論者：眞壁 宏幹（慶應義塾大学）

慶應義塾大学で51回大会が開催されたとき、「教育問題」としての文化」というテーマで研究討議が行われ、現代日本の教育が文化という支えを失った「抜け殻のような教育」になっているとの指摘がなされた。この事態はデータ駆動型社会のもとで加速度的に進行しているように見える。今回の研究討議もこの問題意識を共有しつつ、しかし新たな角度から「文化と教育」という古典的問題に迫ってみたい。

このとき、1990年代以降ドイツ語圏で盛んになった「文化科学（Kulturwissenschaft）」の諸研究が参考になる。記憶研究で著名なアライダ・アスマンによれば（Assmann 2017）、これは、英米圏のカルチュラル・スタディーズと同様、ハイ・カルチャーのみならず日常的営みも対象にし、記号論、言語行為論、イコノロジー、文学研究、ライフストーリー研究、人類学、考古学、脳科学、進化生物学などの知見に依拠した領域横断性を特色としている。その具体的展開はあまりにも多様だが、文化をさまざまなシンボルに基づく実践行為の総体とする点で緩やかな共通点をもっている（Assmann 2017, S. 24ff.）。従来の人文学（ないしはドイツ的には精神科学）が文化を人間の「精神（Geist）」の外化と捉え、その精髓をハイ・カルチャーとしての学問や芸術に見出し、さらにそれを物質や自然、技術に対抗的なものと捉えるのに対し、この文化科学は、文化を単数ではなく複数で捉え、さらに、表象を支えるシンボル行為、その物質的支持体であるメディア・技術、シンボルの産出と受容の器官たる身体の三項関係を枠組みにしながらいデンティティ（自己）形成や文化変容の問題を考察する。なかでも今回注目したいのが、近代以降、「文字・書物」「歴史」に比べ軽視されてきた「口承」「画像」「記憶」というテーマ群である。これらは公共性・ジェンダー・パトスなど現代的問題と交差しつつ、これからの人間形成と教育を語る上で重要になってくるだろう。

だが、こうした文化研究がそのまま「文化科学的教育学」になることは可能だろうか。発表者と参加者とともに考えてみたい。

〈文献〉

Assmann, Aleida 2017: *Einführung in die Kulturwissenschaft. Grundbegriffe, Themen, Fragestellungen*, Berlin : Erich Schmidt Verlag.

【第2日目】14:00～16:30

南校舎5階 南校舎ホール

身体性と教育

——「経験」と「つながり」の基盤を再考する——

司会：田中 智志（東京大学）・西村 拓生（立命館大学）

報告：藤井 千春（早稲田大学）・藤川 信夫（大阪大学）

門前 斐紀（金沢星稜大学）

身体論は、1970・80年代によく論じられていましたが（たとえば、市川浩の身分け論）、現在では、あまり論じられていないように思われます。この課題研究では、一昨年からつづくコロナ禍に加え、情報化の高進というグローバルな社会的現実を踏まえつつ、私たちの身体性について、あらためて考えてみたいと思います。

ここでいう身体性の一つとして、ヨーロッパで古くから語られてきた「身体感覚」（五感による知覚）を挙げることができます（他にも「アニマ」という言葉で示されてきた生動性や力動性を挙げることでもあります）。身体感覚による相手の受容は、言葉・会話の文脈として機能してきました（この受容が乏しいと、言葉は、遺漏・誤解がないようにと、定型のないし冗長的になっていきます）。この身体感覚は、本来的に外に開かれていて、自・他の「呼応」や「交感（共感・共受苦）」を支えています。視覚の場合、相手の「身ぶり」「表情」などが、受容されるものであり、それらが、解釈・推論とともに、何らかの認識（たとえば「退屈している」「興味をもっている」）を作りだし、相手への応答（たとえば「話題を変える」「詳しく話す」）が行われます。しかし、意識、ないし解釈・推論をともなわないように見える、「交感」と呼ばれる、自・他の境界を越える感情とともに、相手に応答すること（たとえば「気遣う」）もあります。この「交感」は、人に対してだけでなく、動物、海、山などに対しても生じます（それは、たとえば、ジャック・デリダの動物論で論じられています）。そのとき、人と動物・自然との「つながり」という（可知的）観念が作りだされることもあります。ちなみに、ラテン語の「コミュニオ」（*communio*）に由来する「コミュニオン」（*communion*）、すなわち神と人の交わりも、この「つながり」に類比されるかもしれません。ともあれ、こうした身体感覚を踏まえた思考は、現代の有用性・収益性に大きく傾く教育現実・社会現実に対し、一つの抗いとなるのでしょうか。

今回の課題研究では、こうした身体性をめぐり、藤井千春会員から、デューイのコミュニケーション論について、藤川信夫会員から、「エスノメトリー法」を用いた授業評価の可能性について、そして門前斐紀会員から、「身体的存在」の技術的変容について、それぞれ、報告していただきます。闊達で実り豊かな議論ができることを心より期待しております。

〔ラウンドテーブル1〕（南校舎4階 443教室）

「政治的なもの」と「教育的なもの」の交差
—政治思想における教育／人間形成論の含意を再考する—

企画者・提案者：岸本 智典（昭和音楽大学）
提案者：関根 宏朗（明治大学）
提案者・指定討論者：小玉 重夫（東京大学）
司会者：田中 智輝（山口大学）

従来、例えば代表的には主権者教育やシティズンシップ教育の必要性やそのあり様を問う議論など、政治学と教育学との双方に関わる問題領域について教育哲学会でも議論が蓄積されてきた。近年では、「政治」や「教育」という制度を支え条件づける「政治的なもの」、「教育的なもの」といった理念レベルの事柄を析出しながら、それらと両者の諸制度との関係を問う議論も活発化しつつある。

こうした知的文脈のなかで本ラウンドテーブルでは、20世紀後半の政治理論家や政治思想史家のいくつかの議論（具体的にはウィリアム・E・コノリーや丸山眞男）を取り上げ、そこにみられる教育的ないしは人間形成論的な思想を分析することで、「教育的なもの」をめぐる教育的な議論の拡大や深まりに寄与したい。

なお、ラウンドテーブルでは提案者二者から各報告をおこなったあと、指定討論者の小玉重夫氏からコメントをいただいたうえで、フロアへと議論を開きたい。

〔ラウンドテーブル2〕（南校舎4階 445教室）

人間形成・自己形成・アイデンティティ形成
—人間形成論的のビオグラフィー研究の来し方行く末を見据えて—

企画者・司会者・提案者：鳥光美緒子（中央大学）
企画者・司会者・提案者：野平 慎二（愛知教育大学）
企画者・提案者：藤井 佳世（横浜国立大学）
提案者：溝上 慎一（桐蔭横浜大学）・山田 浩之（広島大学）

Bildungはドイツ教育学において、教育学研究と実践、双方を方向づける教育学の基礎概念として独自のキャリアを築いてきた。理念主導の独特の学的構想は今なおそれを評価する声がある一方、その固有性への固着を打破し、教育学を社会科学として再生させる動きもあり、後者の構想を実現すべく提起されたのが、「人間形成論的のビオグラフィー研究」（BoBと略称）だった。理念先行で固有の方法論を欠くこの研究構想は、多くの試みと議論を巻き起こす一方、研究成果の蓄積は必ずしも着実とは言えない。私たちはここ数年、この構想に刺激されて青少年の人間形成過程の研究に携わってきたが、研究をさらに進めるため、その理論的方法論的基礎であるBoBを再考することが必要だと考えるに至った。ラウンドテーブルではとりわけ、英語圏の自己形成、アイデンティティ形成研究の知見を手がかりに、Bildung 概念を再考、ナラティブの解説に基づく人間形成過程の研究の更なる展開を考える。

〔ラウンドテーブル3〕（南校舎4階 446教室）

教育哲学研究における「科学性」の再検討

企画者・提案者：鈴木 篤（九州大学）
企画者・司会者・提案者：平井 悠介（筑波大学）
提案者：岡村美由規（広島大学）
提案者：河野 桃子（信州大学）

近年、教育学の「科学性」に注目が集まっている。「科学性」は、「学問性」（学問的知見たらしめているもの）の妥当性や信頼性を支える確固たる基盤として存在している。ただ、科学（学問）研究が備えるべき「科学性」は必ずしも単一のものであるとは限らない。様々な学問領域を包括している教育学の「科学性」の解釈もまた、研究者による多様性が認められよう。

本学会は「教育哲学」を依拠先のディシプリン（のひとつ）とみなす会員の集まる場である。だが、その研究アプローチに目を向けると、実際には非常に多種多様なアプローチがとられている。このことは、各会員においてその研究アプローチの前提とされている「科学性」が決して単一かつ同質のものではない現実を示している。自然科学モデルに依拠した議論の進むこんにち、教育哲学研究者としての私たちは教育哲学の「科学性」をどう捉えていけばよいのかについて、広く議論していきたい。

〔ラウンドテーブル4〕（南校舎4階 447教室）

世界市民的教育の空間を考究する —境界の内／境界を越えて

企画者・司会者・提案者：広瀬 悠三（京都大学）
提案者：生澤 繁樹（名古屋大学）
提案者：米津 美香（奈良女子大学）
提案者：藤井 基貴（静岡大学）

人間社会における現象の加速化と細分化が進む中で、人間は時間的・空間的に特定の枠内に押し込められ、包括的で総体的な世界に生きていながらも、そのような世界に果たして生きているのか、疑わしくなることもある。この複雑な諸相を含む世界に生きる人間のあり方を問う世界市民的教育が、境界を越えてわれわれに迫ってくる気候変動や人間の対立といった現実において、耳目を集めている。

世界市民主義は、しばしば普遍主義や人間中心主義と同一視されることがある。しかしそもそも複雑な動性を包摂する世界を想定する世界市民主義は、はるかに豊潤で多層的な内実を備えている。境界づけることで人間に働きかけてきた教育も、このような世界市民主義から問い直されることで、新たな形態をもつことができないだろうか。本ラウンドテーブルではこのような問いに促されながら、世界市民的教育を多様な位相から解きほぐすことで、さらなる教育の可能性を考察したい。

〔ラウンドテーブル5〕（南校舎5階 456教室）

存在論は教育学にいかなる貢献を果たし得るか：「ハイデガーと教育学」という問題圏

企画者・提案者：森 祐亮（株式会社Open DNA／慶應義塾大学）
企画者・司会者：池田 全之（お茶の水女子大学）
提案者：齋藤 元紀（高千穂大学）
指定討論者：井谷 信彦（武庫川女子大学）

本ラウンドテーブルでは存在論が教育学にどのような意味があるのか、ということハイデガー哲学との関係から問う。ハイデガーは類まれな存在を問う視座をもって、従来の哲学・形而上学の解体を試み、哲学史に新たな光を投げかけた。

ハイデガーの思想は、とりわけボルノウを介して教育哲学にも当然少なからぬ影響を与えている。しかし、その受容の仕方は極めて実存主義的なものであり、ハイデガーの「存在論」と折り合いが付くのかというのが、本ラウンドテーブルの問題提起である。

これに応えるべく、本ラウンドテーブルにおいては司会を池田会員にお願いした上で、ハイデガーに造詣の深い齋藤元紀氏をお招きし、森と共に話題提供を行って頂く。その上でハイデガーとボルノウに造詣の深い井谷会員に指定討論をお願いする。これらを通じて、「教育学者でない哲学者を教育哲学が取り上げる意味」についての議論が、フロアを巻き込んで行われることを期待する。

〔ラウンドテーブル6〕（南校舎5階 457教室）

ウィトゲンシュタイン哲学に基づいた教育実践記述・分析の可能性

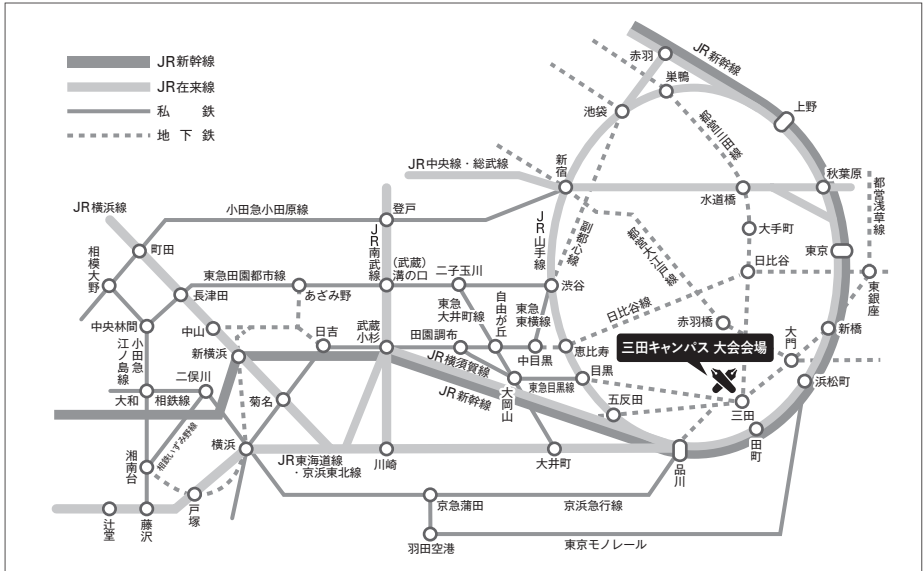
企画者・提案者：平田 仁胤（岡山大学）
企画者：丸山 恭司（広島大学）
司会者・提案者：杉田 浩崇（広島大学）
提案者：山岸賢一郎（福岡大学）

現在、教育学におけるウィトゲンシュタイン哲学の意義が一定程度認識されている。それは我々が暗黙のうちに前提としている言語の機能を反省し、その「教育的な誤謬」を解明することによって、教育の「暴力性」を描き出してきた。

しかし、ウィトゲンシュタイン哲学の意義が教育学に反省作用をもたらすことに留まっているという批判も寄せられてきた。ウィトゲンシュタインが挙げる教育的事例はアクチュアルなものではなく、教育実践への貢献に乏しいとされてきたのである。

本ラウンドテーブルでは、まずは、主にウィトゲンシュタイン哲学と人類学者・杉島敬志の複ゲーム状況概念とを手がかりとして、理科教育、道徳教育、重度障害児のための教育に関して、教育実践もしくは教育者の語りの記述・分析を試みる。これらの作業を通じて、ウィトゲンシュタイン哲学に基づく教育実践記述・分析の可能性を探ってみたい。

慶應義塾大学三田キャンパスへの交通アクセス



〈おもな交通手段〉

- ・ 田町駅（JR山手線／JR京浜東北線） 徒歩 8 分
- ・ 三田駅（都営地下鉄浅草線／都営地下鉄三田線） 徒歩 7 分
- ・ 赤羽橋駅（都営地下鉄大江戸線） 徒歩 8 分

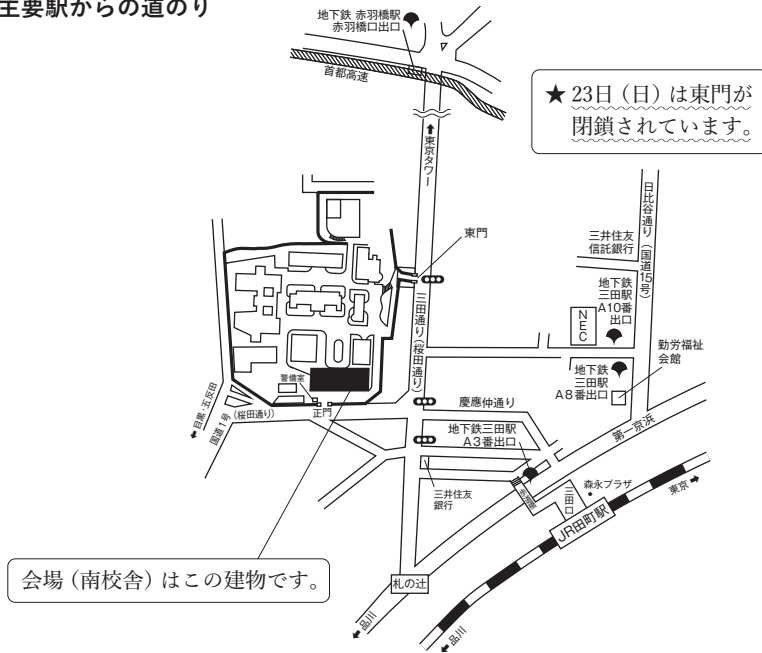
〈主要駅からのアクセス〉

- ・ 東京駅 → JR山手線・JR京浜東北線 → 田町駅（所要時間 約10分）
- ・ 新宿駅 → JR山手線（渋谷・品川方面行き） → 田町駅（所要時間 約25分）

〈空港からのアクセス〉

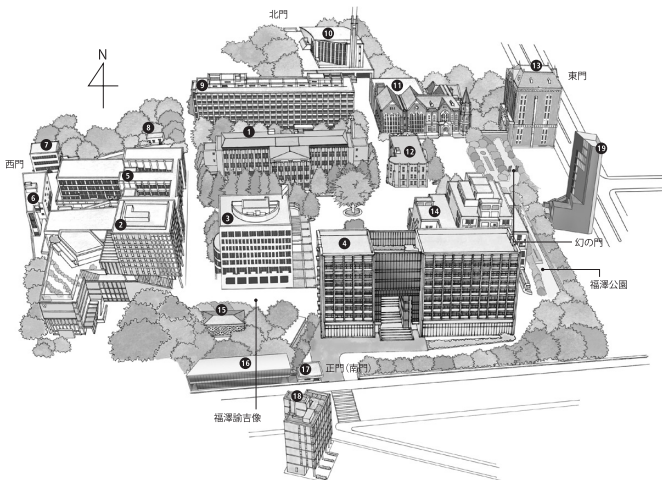
- ・ 羽田空港 → 京急線・品川経由（約20～30分） → 泉岳寺駅（直通） → 都営浅草線（約3分） → 三田駅
- ・ 羽田空港 → 東京モノレール（約20分） → 浜松町駅 → JR山手線・JR京浜東北線（約5分） → 田町駅

■主要駅からの道のり



■キャンパス全体図

大会会場は **南校舎(下の図の④の建物)の4階および5階** です。



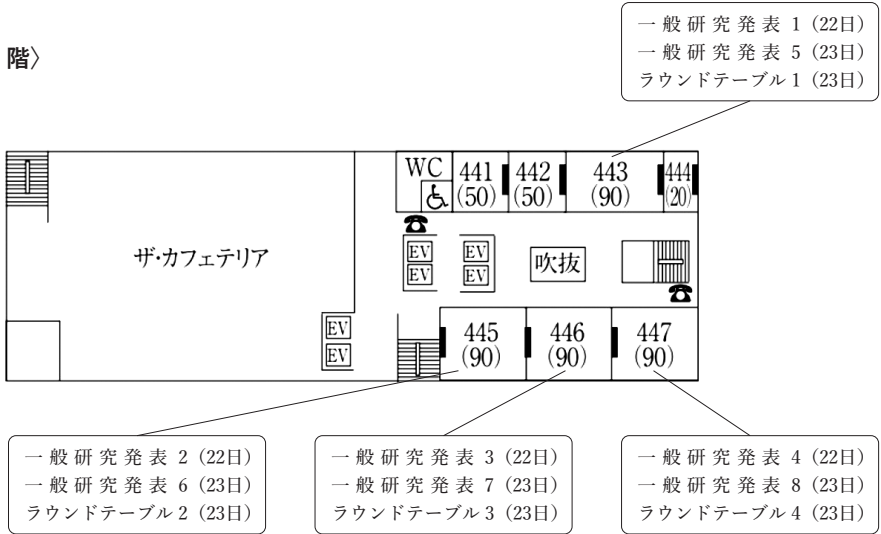
- ① 第1校舎(101-147)
- ② 南館(2811-2842)
- ③ 大学院校舎(311-375B)
- ④ 南校舎(411-477、ホール、学生食堂(ザ・カフェテリア) 社中交歓 萬来舎)
- ⑤ 西校舎(501-545、ホール、学生食堂(生協食堂、山食))
- ⑥ 購買施設棟(生協購買部)
- ⑦ 西館
- ⑧ 労働組合本部
- ⑨ 研究室棟
- ⑩ 北館(大会議室、ホール、ファカルティクラブ)
- ⑪ 図書館旧館(福澤諭吉記念慶應義塾史展示館、カフェ八角塔)
- ⑫ 総監局
- ⑬ 東館(ホール、G-Lab、オープンラボ)
- ⑭ 図書館(三田メディアセンター)
- ⑮ 三田演説館
- ⑯ 三田インフォメーションプラザ
- ⑰ 警備室
- ⑱ 南別館(アート・スペース)
- ⑲ 東別館(慶應義塾ミュージアム・commons)

慶應義塾大学三田キャンパス 大会会場

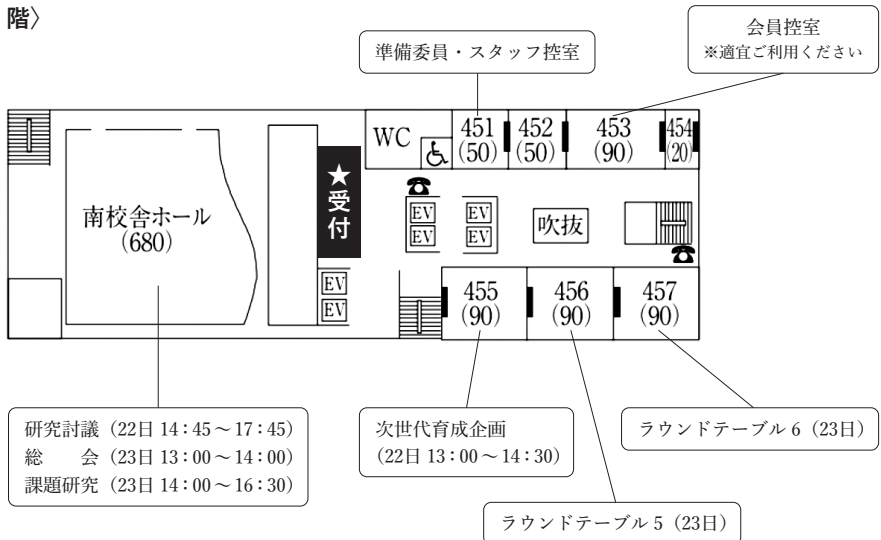
■南校舎 4階・5階 配置図

受付は5階 南校舎ホール前となります。

< 4 階 >



< 5 階 >



表紙に用いた彫刻作品は、イサム・ノグチ（1904-1988）によるもので、作品名は「無」（1951）である。この作品は、モダニズム建築を代表する建築家谷口吉郎が戦災で焼け野原になった三田キャンパスに建てた校舎の一つ「第二研究室」に呼応するよう制作された。谷口の建てた「第二研究室」はパルテノン神殿を思わせるモダニズムの美を体現していたが、イサム・ノグチはこれに応え、三田の丘を古代ギリシャのアクロポリスの丘と見立て、そこに立つ石灯籠としてこの作品を制作した。太陽がこの作品の穴に入ることで、「無」は石灯籠となり、三田の丘を照らす。そこに込められていたのは、この丘で学生も教員も等しく交流し（「半学半教」「社中交歓」、新しい哲学が生成してほしいという願いだった。

しかし、作品完成の52年後、慶應義塾は南館を建てるため、谷口の「第二研究室」を解体し、その内部空間「萬來舎」だけを南館の三階に移築した。それに伴い、この作品はその外に置かれることになった。彫刻と建築と環境が一体になってこそ作品の意味があったことを考えると、移築された作品はもう同じ作品ではない。

この写真で再表象化された作品は、したがって、かつての哲学生成への願いと文化・記憶の伝承の失敗、この二つを想起させるシンボルとなっている。

（常深 新平）

〔教育哲学会第65回大会 準備委員会〕

委員長	松浦 良充（慶應義塾大学）
事務局長	眞壁 宏幹（慶應義塾大学）
準備委員	小山 裕樹（聖心女子大学）
	岸本 智典（昭和音楽大学）
	原 圭寛（湘南工科大学）
	間篠 剛留（日本大学）
	渡邊福太郎（慶應義塾大学）
表紙デザイン	常深 新平（慶應義塾大学・院生）

PESJ 65

OCT 22-23, 2022